

令和4年度第1回 史跡小田原城跡御用米曲輪戦国期整備検討部会会議録

日 時：令和4年5月30日（月）午後2時00分～午後4時30分
会 場：おだわら市民交流センター UMECO 会議室4
出席者：小野部会長、小沢副部会長、高妻部会員、中島部会員、宮内部会員
オブザーバー：神奈川県教育委員会文化遺産課 富永副主幹
コンサルタント：（株）文化財保存計画協会 山田研究員、難波研究員
事務局：鈴木文化部長、小澤文化部副部長、湯浅文化財課長、
小林副課長（史跡整備係長）、長谷川副課長（文化財係長）、
佐々木係長、大島主査、土屋主査、保坂主任
経済部小田原城総合管理事務所 清水所長、諏訪間主査
建設部みどり公園課 山崎係長

【開会あいさつ】

【委嘱状交付】

【部長あいさつ】

【部会員あいさつ】

【事務局紹介】

【資料の確認】

【会議の公開について】

【部会長・副部会長選出】

【部会長・副部会長あいさつ】

議事

（1）報告事項 ア 御用米曲輪の発掘調査成果について（資料1）

事務局説明

資料1に基づき説明

御用米曲輪の発掘成果についてご報告する。御用米曲輪の位置は小田原城総構の中の小田原城址公園、天守閣の北側に存在している。もともと野球場、駐車場があった場所を整備することとなり、解体し発掘調査を実施した。江戸期寛永10年の改変で曲輪の形が作られたが、後世の野球場の改変などを受けている。これを直すことから整備工事が始まっている。その空間は城絵図などに記載が見られる。御用米曲輪、百間蔵と呼ばれていた。土塁上に蔵が描かれ、最大6棟が描かれている。これは発掘調査でも裏付けられている。

御用米曲輪内で発掘調査を複数回行っている。それぞれ目的をもって調査を実施したため、すべてを戦国期まで掘っているわけではない。目的により江戸期

の面までとどめている箇所や戦国期の面まで調査した場所もある。トレンチの間や戦国期まで調査していない面を調査するかは、戦国期を整備するにあたり今後ご検討いただきたい。ただし発掘調査をしていないところも蔵跡などが検出されており、戦国期まで掘ることができない場所もある。

御用米曲輪は整備工事を進めており、まずは曲輪の形を整えることから進めている。北西土塁の堆積状況を確認するトレンチでは、土塁断面が確認された。発掘調査を基に、北西の縁で土塁を江戸期の形に復元する整備を行い、また土塁上を歩けるように整備を実施した。

次に近年手掛けた御用米曲輪の北東土塁は、弁財天曲輪側にある土塁である。事前に行った発掘調査では土塁上の蔵跡や土塁の堆積状況を確認した。その成果を基に、クランク状に曲がった土塁を整備した。また3棟の蔵跡は、範囲を花崗岩で示し、内部にウッドチップを撒くことで表面表示を行った。土塁の土の部分は笹を植え植栽を行った。そのほか宮内庁図には、土塁上に登ることができる階段が描かれている。この階段は風祭石を用いていた可能性があるため、似た凝結凝灰岩の白河石を用いて4つの石階段を整備した。石階段は急なため、安全に昇り降りできるように鋼製階段を設置した。ただし、まだ段差や配管がむき出しであり、一般には開放していない。そのため北西土塁から俯瞰して市民が見学できるようにしている。

曲輪の北西土塁の麓に、瓦積塀と呼ばれる遺構が検出されている。崩れているが、塀が伸びており内部には砂利が敷かれた空間があった。土の斜面には石積が見られた。瓦積塀に用いられた瓦は、元禄地震で被災した二の丸の瓦と同じものが使われており、元禄地震以降の構築物と考えられる。性格についてははっきりせず、煙硝蔵などの可能性がある。そのため性格が分からない状況では無理な復元整備はせず、遺構を保護盛土した上に、樹脂で作られたレプリカで崩れた遺構の状態のまま表現する。瓦積塀の下に敷かれていた根府川石など近い材質の石を用いて整備する。こちらは本年度整備工事をする予定であり、平場の江戸期整備に一部着手することになる。今後、平場を本格的に整備するにあたり、戦国期について検討を進める。

平場からは江戸期の蔵跡が3棟検出されている。4号、5号、6号蔵跡と呼んでおり、発掘調査では蔵跡の基礎が確認された。6号蔵跡の下から戦国期の遺構が確認され、池跡や石組遺構、建物跡が展開していた。そこに構築物を再現するか、遺構を見せるか、遺構を守りながら2時期の遺構を誤解を招かないように見せる、などの課題がある。

戦国期の遺構は、曲輪の南西側で面的に確認された。位置としては平場の半分にあたる。南東端は斜面であることがわかっており、戦国期範囲の西側は斜面を復元する。もう半分で館の奥の部分を再現することとなる。

戦国期エリアは、7つの面でとらえられる。その中で鍵となるのは、6次調査で検出された地割れ面が重要である。寛永10年地震の痕跡であると考えられている。地震後稲葉氏により盛土され、その後蔵が構築された。

第1面は、江戸期に6棟の蔵跡が存在した。土塁上に3棟、平場に3棟が確認されている。6号蔵跡は18世紀の瓦を大量に含む土坑上に構築されていることなどから、文政4年ごろに構築されたと考えられている。

第2面は江戸期で蔵が5棟だった時代である。寛永10年から6号蔵跡ができる文政4年ごろまでの江戸期に長く続いた時代である。

第3面は、戦国期末から寛永10年ごろである。寛永10年の被災面がこの面になる。四間十間の構造物が複数検出され、蔵跡の可能性が考えられている。発掘状況と江戸初期の加藤図に描かれた建物との類似が見られる。また正保図では百間蔵と記載されている。天正16年の虎朱印状には、百間蔵の材木を申し付けると記載があることから、戦国期の終わりから江戸期のはじめにかけて蔵が複数存在したものとみられる。先に述べた通り、発掘調査でも総柱の建物群が検出され、同時期の蔵跡が確認されたことになる。さらに、この第3面では砂利が敷かれていたことがわかっている。

第4面は戦国期の遺構であり、第3面の砂利の下にあたる。砂利面の広がりが限定的なため、面としてとらえることは難しい状況である。

第5面は、建物跡、池跡、石組遺構が現れる。5、6面は建物の改修や増築による変化をもとに分けている。整備の検討では第何面を整備するかが議題になると考えている。この面の東端の池跡は2段階あると考えられ、後半段階は砂州、砂利が見られる。池の脇には9号掘立柱建物跡や砂利が敷かれた空間である。建物の下に石組水路があり、池に水が流れる構造になっている。脇に井戸跡が見つかり、柱跡も見られることから上屋があったと思われる。2号切石敷遺構は、西側斜面の際に作られている。池跡と同じように石塔を再利用し、四角い石の面を合わせるほか、互い違いに組むなどしている。3号切石敷遺構は、三浦半島産の凝灰質砂岩である黄土色の鎌倉石が用いられていた。黒い石は、箱根の溶結凝灰岩、巨石には安山岩が使用されている。凝灰質砂岩である鎌倉石は非常にもろく、露出には向かない石材である。上に盛土をしてレプリカを設置する場合でも、凝灰質砂岩を保存処理することが検討される。本遺構は、これらの石をモザイク状に不規則に配置していることが特徴である。遺構の中央には穴があり、石敷きは、穴に向かって傾斜している。穴の脇には安山岩の巨石が立っており、これは板碑の転用と考えられている。これらが6号蔵跡の下を潜り、東側に展開している。

第6面では14号建物跡の下の建物が、建て替えや石組水路に見られる変化をもとに分けている。しかし戦国期の空間は大きく変わらないと考えられる。この

面について、池跡の下は州浜が除去され、池の底が出てきている。池の護岸は石塔を転用した石組が見られる。四角い部材を裏にして護岸を作って曲線を構築している状況が確認されている。

第7面は、第6面の建物跡群の下に部分的に古い面が確認されている。第6面の遺構保護の観点から、7面の遺構の広がりをつまみきれしていない。現在の段階では御用米曲輪戦国期の最も古い面である。ここでは建築物が確認されている。

戦国期の各面の変化についてまとめると、第3面から第4面は砂利面や硬化面、第4面から第5面は空間構成の変化、第5、6面は増改築の変化である。

出土遺物ではカワラケが主体である。9割以上がカワラケであり、貿易陶磁器は少数であることが特徴である。

こういった空間の理解を深めるため考察した事例は、2018年に天守閣で行ったシンポジウム「小田原北条氏の絆」で、部会長である小野先生に御用米曲輪の性格を考察いただいた。本市として先生の考察を踏まえ、屋敷の会所などの空間のほか、どのような空間が広がるのか、主殿などの空間がどこに位置するのか、未調査部分を追加調査で確認しながら空間の性格の裏付けを行うことが、戦国期整備検討の中で必要になってくるものと考えている。

御用米曲輪の発掘成果の報告は以上である。

質疑

部会長

今のような状況の中で、発掘調査状況について確認、コメントはあるか。

部会長

発掘調査範囲図について、検出した時代ごとに色を分けたものを用意してもらいたい。今後追加発掘が必要な場所などの検討に必要である。

高妻部会員に本部会への参加をお願いした理由は、石の問題がある。遺構を露出するにしても、上に再現するにしても、保存がしにくい石である。サンプル的に取り出した石を見てもらいたい。高妻部会員は石の耐久度などの確認方法を開発した側である。石の保存などの参考にしていただきたい。

ほかに意見なし。

イ 御用米曲輪戦国期整備の課題について（資料2）

事務局説明

資料2に基づいて説明

これまでの整備の流れから説明する。平成 22 年度から整備に向けた動きが始まった。平成 22 年度は、既存の建物の解体にともなって発掘調査、また樹木整理などを順次行った。

平成 25 年度の発掘調査で、戦国期の屋敷の広がりが確認された。昭和 57 年から部分的に確認されていたが、面的に確認されたのがこの時である。その後も発掘が続き、平成 27 年度の発掘調査概要報告書を発行した。この概報が整備の基軸となる資料である。整備は曲輪外周である北西、北東土塁の整備を行い、本年度に瓦積塀を復元する予定である。

会議資料に、整備基本設計作成時の資料を添付させていただいた。平成 30 年度に江戸期・戦国期整備の基本設計策定作業を行った際に、戦国期の検討をより十分に行うべきとして、補助金を減額、変更申請し、戦国期については検討を取りやめていた。そのため、戦国期については基本設計を行っていない。お示しした資料は、その際に検討資料として作成したものである。本資料は過去に行った検討として考えていただき、再検証、再検討する必要があるものと考えており、これを基に幅広い議論をするための資料としていただきたい。令和 4 年度の戦国期整備の部会立ち上げは、改めてのスタートと考えており、ご協力いただきたい。

次に部会の概要をお示しする。部会の検討内容は、今年度、来年度に検討していただきたい課題である。はじめに、第何面を復元するかである。事務局としては建物跡が出てくる第 5 面、第 6 面を考えているが、整備面を決定していただきたい。

次に切石敷遺構、池跡の復元方法である。実物かレプリカか面的に見せられるかである。検討の際には、上に乗る 6 号蔵跡の存在も課題である。また、切石敷遺構の石材の耐久性の問題もある。

次に建物遺構の表示方法である。柱穴を平面表示にとどめるか、建物の上屋についても考えられるのかも検討していただきたい。

次に寛永 10 年に削られた南西斜面の復元、植栽についてである。ここは庭園の背景となる。

次に動線の検討である。検討が進んでからのことになるが、どのように人を回遊させるか検討いただきたい。

次に江戸期と戦国期の境界処理についてである。二つの時期を混同しない整理が必要である。江戸期の土塁、瓦積塀は先に整備が進むため、来場者が戦国期と混同しないようにしたい。基本設計では江戸期と戦国期の間を 50 センチの段差で分ける想定である。北西土塁や北東土塁の仕上げについては、この想定で整備している。このすでに仕上がっている部分との調整、検討が必要である。今年度まで江戸期の整備を進めているが、これ以上整備を進めると平場の遺構確認

などができなくなるため、事務局としては瓦積塀を復元した時点で整備工事を止めようと考えている。平場の工事は、追加の発掘調査後、戦国期の整備を確定した後に再開する予定である。瓦積塀の復元まではご理解いただきたい。

次に遺構の性格、広がりを確認するため、追加の発掘調査範囲を検討していただきたい。次回の部会でのメインになる。部会長からご指摘があった戦国期が見つかった、見つからなかった、江戸期までしか発掘していないことがわかる色分けをした図をお示しし、発掘調査をどのように行っていくかをご検討いただきたい。これを基に次年度の調査費を予算計上していく。議論いただいた内容は、文化庁と調整し、確定していきたい。

次に御用米曲輪の整備スケジュール予定をお伝えする。未定部分も多いが、検討の参考として考えていただきたい。今年度は基礎調査を始めている。基礎調査は基本設計の前に実施する文化庁の補助メニューであり、複数年可能な補助である。ただし今年度、来年度で終わるとは考えていない。発掘調査は手順を追って行うため、複数年になる可能性を含んでいる。その後の基本設計、実施設計はそれぞれ一年間みの補助メニューであるため、整備内容を確定させた後に行いたい。可能性として予定に入れさせていただいたが、上屋の復元を行うことにした場合などは、上屋の復元検討委員会にかけの必要があり、多年に及ぶことになる。表面表示のみであれば、最短で令和8年に工事となる。ただし文化庁の補助金で行うため、シーリングなどもあり確定ではない。設定した目標は2030年が完了時期である。前後するものであるが、専門委員の皆様にはこの完了時期までお付き合いいただきたい。

2031年以降に平場整備工事とした。これは江戸期の御用米曲輪南東堀、相生橋など曲輪の入口部分の整備をおこない、これを以て御用米曲輪の整備完了となる。

次に令和4年度基礎調査業務委託についてご説明する。この基礎調査は先ほどお伝えした文化庁の補助メニューである。内容は基本設計に先立って行う整備手法検討に関する調査業務委託である。年度末に成果品が求められる。資料は、今年度コンサルタントに検討を委託した項目である。この中には、部会で検討してもらうこともある。仕様では、部会の指示で資料作成することも想定している。

次の資料は、戦国期の整備検討エリアの平面図である。現在のところ、以前の基本設計時に作成したエリアを想定している。江戸期より50センチ下に平面表示するとしている。

次の資料は、平成23年史跡小田原城跡調査・整備委員会説明資料である。現在想定しているものとして理解いただきたい。戦国期は発掘調査で戦国期の遺構を広く確認した部分である。また戦国期の遺構を表示する方法の案として示した。戦国期以外の場所は、すでにこのような検討が進んでいるものをご理解い

ただきたい。また資料に基本設計時に作成した御用米曲輪整備イメージ図を添付した。平場を江戸期の形に復元し、その一部に戦国期の遺構を復元する予定であった。江戸期から50センチの段差があり、戦国期をレプリカ表示しようとしたイメージ図である。寛永10年まで山がせり出していた部分を復元する。4、5号蔵跡は一部半立体にした表面表示にて行う予定であった。この2棟の蔵跡については実施設計を行っていない。基本設計で止まっている部分と実施設計を実施した部分とが、ちぐはぐな状況に思えるが、一度立ち止まって戦国期を検討しようとするものである。江戸期の基本設計についてはこのような成果があるとご承知いただきたい。

次の資料は御用米曲輪平面図である。長軸No.9、短軸No.3、8の断面図を作成した。

No.3断面は、すでに整備が完了している北東土塁になる。遺構面から盛土し復元した面である。曲輪を横断し途中で江戸期の4号蔵跡がある。4号蔵跡遺構面から保護層を設けて遺構表示をしていることを示している。また瓦積塀も保護層を設けて上にレプリカを作成する。遺構面の勾配と瓦積塀の保護盛土があるため、このような勾配としている。

No.8断面は、蔵跡に掛かりながら戦国期の整備範囲に跨るものである。こちらは北東土塁の整備を完了している。また、土塁の裾のみ盛土を行っている。江戸期の5号蔵跡、6号蔵跡を横断する断面である。資料の上下段の境目辺りが江戸期と戦国期の境目になっている。5号蔵跡から先に50センチ段差を設け、6号蔵跡の遺構がパックされて残るようにしている。戦国期の遺構面は、戦国期整備面より1.3メートル下になる想定である。保護盛土した上にレプリカで表示することを想定した数値である。例えば、遺構の現物を一部見せるとすると、高低差が大きく、戦国期、江戸期の整備高をどのようにするかご検討いただく必要がある。

No.9は長軸に設定した断面である。現在の戦国期整備範囲には入っていない。蔵跡を保護盛土したうえで整備することを示している。御用米曲輪の南東堀もこのように整備し、曲輪の少し外まで整備する予定である。

このように高低差があるなかで、どのような見せ方をすべきか検討することになる。これは後々具体的に示しご相談させていただく。

「戦国期整備の課題」として、建物・庭園等の諸要素を含めた戦国期御用米曲輪の空間構成の比定のため、令和5年度から追加調査を検討している。次回から内容の検討をしていただきたい。

また、戦国期整備対象遺構面の決定について今後検討いただきたい。

さらに遺構面表示方法の工夫、整備手法の選択、決定、活用方法の検討をお願いしたい。平面表示にとどめるか、レプリカにするか、石を用いた表示にするか

などを議題にしたい。

今後の課題としては、戦国期整備面と隣接している江戸期の4、5、6号蔵跡と戦国期整備との問題を議論していただきたい。

江戸期エリアと戦国期エリアの境界処理として、基本設計では50センチの段差を設けるとしているが、どのように行うかを再検討いただきたい。

維持・管理方法の検討も令和4年からの基礎調査で検討をする。

全体スケジュールの再想定として、2030年に完了する予定で考えている。

工事は継続的に行ってきたが、戦国期整備については平成27年度の史跡小田原城跡調査・整備委員会で説明した内容から検討は殆ど進んでいない。課題は多いが、御用米曲輪整備の再スタートと位置付け、一つ一つ解決していきたい。

質疑

部会長

親委員会では以前の基本設計が了承されていた。それを継承するかは別にしても、それを叩き台としてこの部会で検討していくという認識でよいか。親委員会に参加している小沢部会員、宮内部会員は了承しているか。

副部会長

戦国期の整備の検討はしばらく止まっていて、委員会にかかってもいなかった。2週間前の委員会では江戸期部分の整備に関して、瓦積塀を本年度整備する方針が示された。戦国期の検討は3年間ほど無いというのが実情である。

部会長

戦国期エリアは部会で検討してくれということで、親委員会は了承しているか。

副部会長

先の整備委員会で部会の設置が承認され、その成果を待つという形になった。

部会長

了解した。調査の予算は補助金の基礎調査として行うということだった。これは単年度ごとに報告が必要だが、調査自体は複数年度行えるということだよいか。

事務局

よい。

部会長

他に確認することはあるか。

副部会長

大きな検討課題のひとつに、どのように遺構を表示するかがある。令和4年度に表示の方法の回答を出すということだが、追加発掘調査は令和5年度になる。調査を待って遺構の性格や空間を考え直すことになる。それによって遺構の表示や整備の方向も変わってくる。これを令和4年度に行うのは難しい。

事務局

基礎調査では建物を復元するとしたら幾らか、どのような作業が必要か、14号礎石建物跡が復元できるのかといった資料の収集、可能か不可能かといった検討を成果としてあげる。例えば切石敷遺構を再現する石が入手可能か、資材の量などの事前調査を行うものである。仮に整備範囲が広がっても、基礎調査で出した資料を基に計算可能と考えている。

部会長

基礎調査の内容については了解した。この問題について、ほかの委員から意見はあるか。部会での主な検討内容、基礎調査内容に過不足はないか。基礎調査は複数年度調査可能とのことであるが、令和5年度に発掘調査がある。その結果を基に行うか、事前に調査してもらおうか、皆さんの意見を聞きたい。

部会員

今年度何ができて、何ができないか、来年度発掘調査で検討材料を増やすことを前提にして、その前の段階である今年度中に何が検討できる内容で、調査できるのかを切り分けてもらう必要がある。事務局が示した石の問題などは事前調査できることである。

部会員

発掘調査で得られる情報や歴史的な情報を材料としてそろえていかなければならないことはよくわかる。切石敷遺構をどう復元させるか、オリジナルを露出させるか、今年度に答えを出すなら、埋戻しして表面表示するしかない。遺構は素晴らしいものである。できれば露出して見学できるのが良いだろう。瑞泉寺も手掛けているが、脆い石である。環境調査や石の強度の調査に最低2年はかかる。調査を計画するには、モニタリング機材を設置するなどの作業があるため、早くても今年の秋からしか取り組めない。そのようなスケジュール感をもっていた

だきたい。単年度事業とのことで、3月で予算が閉められると環境調査する機材は4、5、6月の梅雨時期は借りられないことはあってはならないので、市の単費でやるなど検討いただきたい。

部会長

コンサルタントで行うことが多いと思う。複数年度にわたり行わなければならないと考えているがいかがか。

コンサルタント

弊社でもレプリカで庭園を復元、遺物の形跡を保存処理し展示した事例がある。小田原城の遺構の情報を確認し、ポテンシャルを確認する必要がある。最終的にできる形の提案をすることができる。

部会長

最終的に提案するものは、部会や市で決めた案から提案をすることになると思う。選択を議論する上で、メリットやデメリットを含めた、必要な材料を用意していただく必要がある。部会員から用意できるものもあるが、コンサルタントに用意いただくものもある。

コンサルタント

前段階で用意できるものは取り組みたい。石材の確保、3D データからレプリカを作成できるかなど、専門業者に問い合わせる必要のある情報を得て部会に提示したい。

部会長

また何面目を復元するか議論する際に断面図を含めた、いくつかのシミュレーション図面を用意するなど議論の材料が必要である。多くの課題がある中で図面などの材料を用意できる能力があるか。

事務局

課題は複数年度で検討していただきたい。結論を出すのは単年度では難しい。年度末に文化庁に資料が求められるが、結論を出す必要があるか確認する。途中経過を報告し、各項目を複数年度で検討していくことが可能と理解している。

オブザーバー

中間報告のようなものを出していただくことで可能かと思う。文化庁の岩井

調査官に確認したい。

部会長

調査内容の各項目が複数年度にまたがることが可能か、時期的にずらさなければならないのか。

急ぐ項目は初年度、後でもよいものは次年度以降ということが出来るか確認していただきたい。

オブザーバー

確認が必要だが、複数年度可能と認識している。

部会長

文化庁との認識の状況は確認していただくが、調査項目の過不足について意見をお聞きしたい。

部会員

部会での検討範囲を確認したい。令和13年最後に相生橋付近の整備とあるが、鉄門坂の整備もこの部会で検討するのか。また庭園は坂の下まで続いていくが、これは調査できないという理解でよいか。それも検討範囲であるのか。

事務局

黒鉄門坂は本丸にアクセスする主要な入口である。全体整備復元するには環境が整っていない。整備は江戸期の整備範囲である。ただし、坂には石段が残っているものの、鉄門坂の遺構が落ちてこない限りは調査検討範囲と考えている。

部会長

具体的な発掘の内容については次回議論するというのでよいか。

事務局

よい。

ほかに意見なし

部会長

結論を出すのではなく、調査をして資料をそろえながら、数年かけて方向性を出していくということになる。

高妻部会員にお願いする環境調査や石の調査、代替品はコンサルタントで調査してもらおうと思う。

埋め殺しにするにしても、そのまま耐えられるのか、地中で保管するにはどんなことが必要かなど調査する必要がある。早めに調査してもらう必要がある。

部会員

その場合の具体的な調査は、コンサルタントにお願いしていいか。

部会長

高妻部会員の指導、時期の指示などをしてもらいたい。

事務局

環境、地下水脈、排水などの調査はコンサルタントにお願いできると認識している。

部会長

大方この内容で進めるということでよいか。

部会員

基礎調査は1年ではなく、必要な項目が出てきたらその都度追加する。

1年目はこうです、2年目はこんな課題もありましたとしたらよいと思われる。

オブザーバー

そう思う。

部会長

整備そのものの問題以外にも、遺構を保存する問題がある。水の処理などが大きな問題になると認識している。

次にスケジュール案について、全体のスケジュール案はいかがか。

副部会長

基本設計は令和6年とは限らない。後ろにズレるという認識でよいか。

事務局

そうである。

副部会長

追加調査の進展により大きく変わる。

部会長

追加調査が大きな問題である。何を知りたいか、ここまではやるということを決める必要がある。7月にその問題を決めるために、事務局にどんなデータを用意してもらうか。遺構を丁寧にみるためにスライドが欲しいなどあるか。

また、どのような調査をどこまでやるのか考える資料について意見はあるか。

部会長

既存の調査で、なぜ掘らなかったのか、掘れるのか、トレンチをどこまで下げたかの資料が必要である。もうひとつ、戦国期の遺構、奥の方の庭園と会所の空間しかわかっていない。表側のハレの空間、主殿や広場については、曲輪の入口がわからないと全体がわからない。推定でもよいから戦国期の曲輪の全体図を示せるか。調査の可能性としてそこまで情報を用意できるか。

事務局

現状を考えると曲輪入口は北東方面と考えられるが、北東土塁は整備済みである。そして土塁の外側は江戸期以降の堀になるので、残っていない可能性がある。そのため現況範囲で、曲輪の入口を見つけることは難しい印象である。曲輪の中の入り口付近に存在する建物群が見つかれば、そちらが入口だろうということは判断できるかもしれないが、現況で把握することは難しい。

部会長

可能な範囲で少しでも情報を補填できるようにしたい。次回、現場を含めて徹底的に検討したい。

部会員

地中レーダー探査は行ったことがあるか。

事務局

西村康先生が昭和 57 年の第一次調査の際に、地下探査を行った。地山、谷があったことがわかっている。これは電気探査であった。

部会員

旧地形が出ているということである。地中レーダー探査をすれば柱穴などわ

かることがある。その結果は調査位置の検討にも役立つため、検討していただきたい。

部会長

今年度の部会開催時期について、この中で検討できるか。ご意見はあるか。

特に意見なし。

部会長

それでは、諸々の課題は今年度の残り4回の中で詰めていきたい。

課題の確認は以上でよいか。

ほかに意見なし。

ウ 現地視察

- ・ これまでに整備を完了している北西土塁、北東土塁、北東土塁上の蔵跡の平面表示について説明する。
- ・ 戦国期整備範囲をロープで明示し、曲輪平場全体との位置関係を確認する。
- ・ 近世に削平された南西側斜面に地形復元が必要な状況を説明する。

(2) その他

次回会議について

事務局

次回は7月11日に開催する。

第3回は8月下旬から9月上旬で調整を行う。